

# 縦長剥片

— 西北九州における縄文時代の石器研究 —

橋 昌 信

## 一、縦長剥片の概要

後期旧石器時代の「石刃」ないし「石刃状剥片」と形態的に極めて類似した黒耀石製の縦長剥片が西北九州の縄文時代の遺跡において注意されたのは意外に古く、その最初のものとして大正時代の末、佐賀県嬉野遺跡、長崎県有喜貝塚の調査に認めることができる。これらの調査では「剥片鏃」に關心の主体が置かれているもの、石鏃の素材としてまた縦長剥片自体が利器として使用された可能性が指摘されている。同時にヨーロッパ旧石器時代の「マデレーヌ期のもの」と相似するもの<sup>①</sup>として問題視されている。その後はさしたる注目もされず年月が流れ、昭和三十年代の中頃、長崎県筏遺跡さらに佐賀県鈴桶遺跡の調査において再び注目されることとなる。特に鈴桶遺跡の発掘調査では四〇〇点余の縦長剥片（刃器・刃器状剥片）と二五〇点を越える石核が発見され、特殊な刃器技法——「鈴桶型刃器技法」——の提唱とその所産の時代について大きな波紋を投げかけると共に西九州における黒耀石製の縦長剥片の存在を一躍学界に知らしめたのであった。それ以後、西北九州の縄文時代遺跡にお

たてなが

① 註1

② 註2

③ 註3

④

註4

いて資料の報告が行なわれ、<sup>註5）9）</sup>一方では縦長剥片を素材に用いた「剥片鎌・つまみ形石器・サイドブレイド」などについての論巧をみる<sup>註10）14）</sup>ことができる。この様に西北九州の縄文時代に黒耀石製の縦長剥片およびそれを素材に用いた剥片石器の一群が存在する事が次第に明らかにされていると言えよう。

西北九州の縄文時代の遺跡において出上している「縦長剥片」については以下の概念規定が考えられるであろう。①剥片の両側面および背面（主要剥離面と反対の面）の稜線がほぼ併行に走り、剥片の最大幅に対してその最大長が二倍以上ある縦に長い整った形状を有すること。②剥片の横断面が薄く三角形ないし台形状を呈し、側面に鋭利なエッジを具備していること。③剥片自体が利器として用いられる一方他の剥片石器の素材としての目的な剥片であること。④剥片の剥離の方法として「鈴桶型刃器技法」ないしそれと極めて強い関連が想定できること。⑤石材として漆黒色—黒色を呈しガラス光沢が強くて半透明な特徴をもつ伊万里市の腰岳産と推定される黒耀石が集中的に撰択されていること。

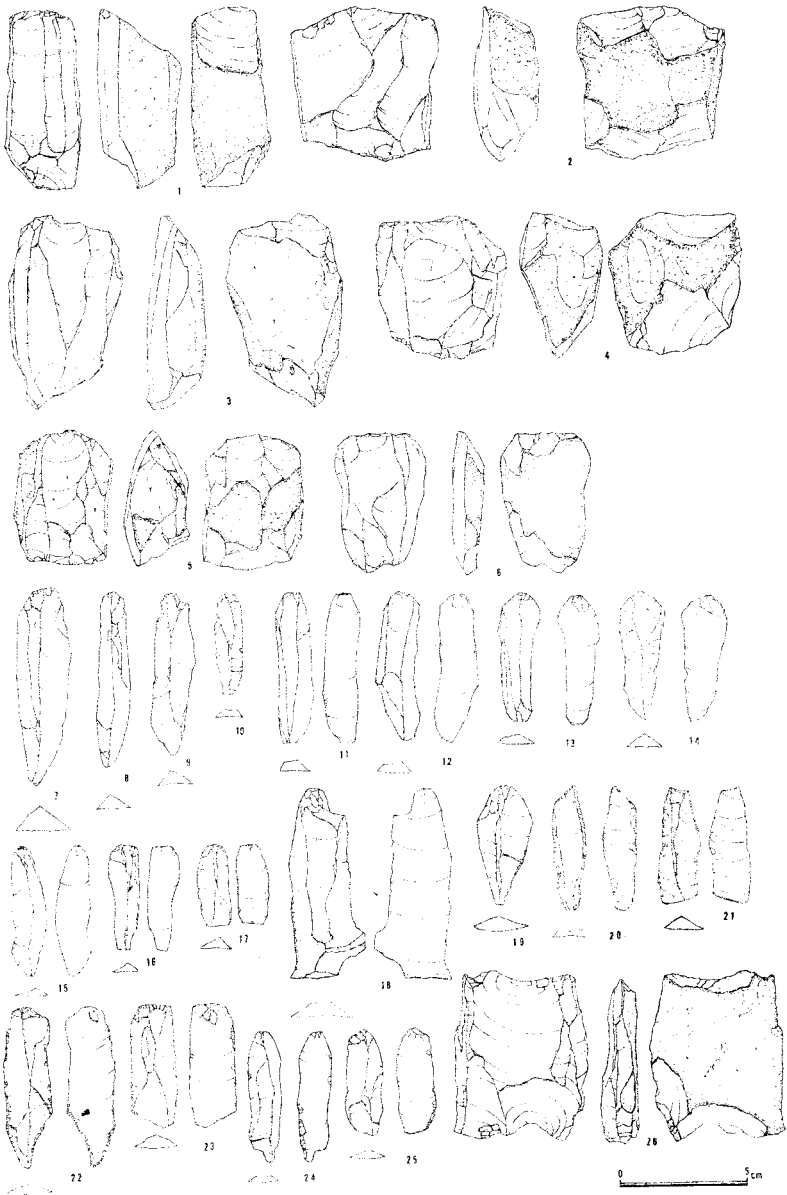
これらの諸特徴は従来「刃器・刃盤状剥片・石刃」と呼称されている剥片に共通するものである。これらの名称を用いなかったのは、刃器としての利器以外に他の剥片石器—剥片鎌・つまみ形石器・サイドブレイドなどの素材としての要素を多分に含んでいることを重視したためである。また後期旧石器時代のメルクマールとされている石刃とは現時点では区別しておく必要を考慮してからのことである。しかしながら「縦長剥片」という名称では先の概念規定以外の単に長い形態の剥片として理解され明確さを欠くため必ずしも適当な名称と思われないので再考すべきであろう。

## 二、縦長剥片と石核

縦長剥片の基本的な特徴については先に述べた通りであり、こゝでは縦長剥片およびその石核の形状と剥離技術について観察することにした。

**縦長剥片** まずその大きさであるが、打面から末端までの長さは5cm前後に大多数が集中する傾向が窺えるのである。多量の縦長剥片を出土している鈴桶遺跡（第一図7～10）では5～8cmのものが全体の50%以上を占めており、福岡県柏田遺跡<sup>註15</sup>出土の資料（第一図22～25）では4～5cmに集中する結果が得られている。腰岳の西側に位置する佐賀県平河原遺跡（第一図15～17）・観音木遺跡（第一図11～14）出土の縦長剥片<sup>註16</sup>の大多数も5cm前後の値いが求められるようである。一方幅については長さ以上に斉一性が看守でき、一～二cm内におさまっている。しかもこの数値は縦長剥片を素材に用いたと推定される剥片鎌やつまみ形石器とも正に符合するものであり、いかに目的的な剥片であったかが察知でき一定の剥片剥離技術の存在を知ることができるのである。

次に縦長剥片の打面構成については、その大半が一回ないし数回の大きな剥離面によって形成された平担打面で、しかもその打面は総じて小さく打面に接して調整剥離―頭部調整―が丹念に施されている。資料中には剥片の背面と打面が交わる個所にスリガラス状の擦痕が観察され頭部調整の一種と判断できる。打面近くに認められるこれらの調整は剥片剥離作業の過程において施されるものである。すなわち剥離作業を行う際、その前に剥離された剥片の剥離面の両側面に相当する部分は幾分盛り上っており、特に打面近くでは突出が顕著なため予めその部位を入念に調整しその後剥離を行なった為と考えられる。なお剥片の打面と主要剥離面のなす角度は一二〇度前後を計ることができる。



第11 図 各種の縦長剥片の石片の図 船橋遺跡(1-8、7-10) 船橋本遺跡(13-11) 平野多取跡(15-17) 舟倉跡(18-19) 船橋遺跡(20-21) 船橋遺跡(22-26)

縦長剥片の打面近くは頭部調整が行われている事もあって剥片の最大幅の数値を下廻り平面形は緩やかな山形を呈する傾向が窺える。打面と逆の末端は全般的に薄くて尖りぎみであるが、ヒンチフラクチャーにより平坦な形状を示すものも存在している。

西北九州の黒耀石製縦長剥片の最大の特徴として、剥片背面に観察される上下二方向の剥離面の存在が挙げなければならぬであろう。剥片剥離作業の過程で一端を打面として剥離を行ない所定の剥離が終了するとそれまでとは逆の一端を打面として用い剥離作業を継続して行なっているのである。実際、剥片の両端に打面を残している例が知られるのである。もつとも全ての縦長剥片の背面に上下二方向からの剥離面が観察されるというのではなく、一方向のみのものも相当数存在しているのである。そこで西北九州における縄文時代の縦長剥片剥離技術は、一般的な剥離技術では一端のみを打面とした一方向のみの剥離を基本とする中において上下両端を打面とする特殊な剥離技術を具備している点を重視すべきであろう。

**石核** 上述したことから西北九州の縄文文化に見られる黒耀石製の縦長剥片がいかに斉一性を持った目的な剥片であったかが理解され、これらの縦長剥片を剥離した石核にも当然規制化された一定の技術を看守できるはずである。そこで縦長剥片の出土例に見合う多量の石核資料を通じての観察・分析をすべきであるがこれまでのところ縦長剥片を出土する遺跡数や出土例に比較して石核のそれは極端に僅少と言わざるを得ないのである。その為、石核の観察は数少ない遺跡の断片的な資料に寄らざるを得ない現状である。

石材は当然縦長剥片と同様であり漆黒色／黒色を呈し介在物がほとんどない良質なもので、自然面は縦に細長い縞状の流理ないし小さな虫蝕状の凹みが認められほとんどの大ききの角礫状の原石が選択されている。肉眼で

観察される諸特徴からすれば伊万里市腰岳産と判断されるものでは占められている。

石核の剥片剥離作業面の長さは6cm前後、幅は四〜6cmで正面観はほぼ長方形を呈している。打面は剥離作業面から背面に向つての斜め方向の大きな剥離面によつて形成され、しかも上下の両端に認められる。剥離作業面と石核の打面とのなす角度は六〇度前後となり縦長剥片に示めされている角度に対応する値である。石核の剥離面はほぼ一面のみに限られており、背面には自然面あるいは節理面を大きく残している。なお石核の側面観は両設打面の背面への傾斜によつて角ばつた「D」字形を呈している。前に触れた様に縦長剥片を剥離したと想定される石核の出土例が少ないため全ての縦長剥片がこれらの石核から剥離されたと断定できないであろうがその可能性は極めて大きいと考えられる。

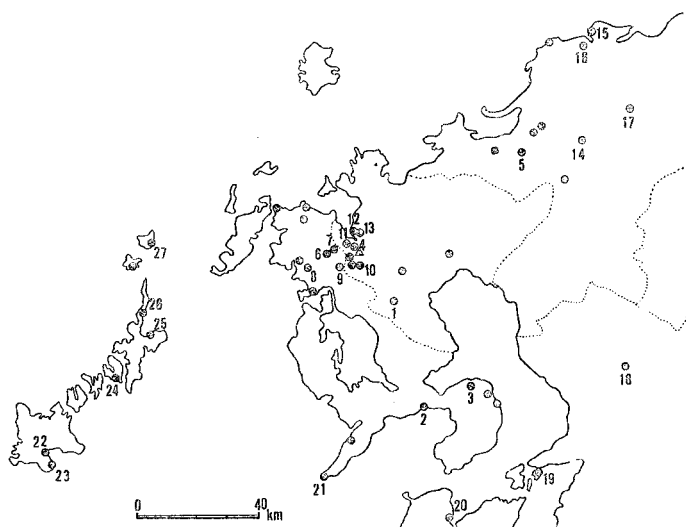
観音木遺跡（第一図4〜6）、柏田遺跡（第一図26）などの資料で剥離作業の順序を観察した結果、石核の両側面にまず剥離が行なわれた後、中央の部分に数回の剥離が施されており、石核の外側から中央へという順序で繰り返し剥離作業が進められたものと推定される。この剥離順序は剥離された縦長剥片にも表れるはずであり、ちなみに縦長剥片のどちらか一方の側面に自然面・節理面ないし石核調整剥離面を残している資料の剥離面の切り合いを観察したところその大多数では外側すなわち剥片の自然面などに接する個所の剥離が行なわれ、その後はその剥離面の内側の一部を切る形で次の剥離が施されており、石核で観察される外側から内側へという順序に符合するのである。<sup>註17</sup>

西北九州の縄文時代の遺跡において出土する縦長剥片および散発的に知られる縦長剥片の石核と想定される資料の諸特徴は佐賀県伊万里市所在の鈴桶遺跡出土の多量の刃器・刃器状剥片とその石核（第一図1〜4）に認められ

る特徴と合致するものとみなされるのである。すなわち「鈴桶型刃器技法」に極めて強い関連性・類似性を求めることができるのである。それ故西北九州の地において縦長剥片をはじめ剥片鏃・つまみ形石器・サイドブレイなど黒耀石製の剥片石器の存在は鈴桶刃器技法そのものあるいはそれと強い関連を有する剥片技術の上に立ってはじめて理解され得るものと考えられる。そこでこれらの剥離技術に対して、「鈴桶型縦長剥片技術」という仮称を与えることにしたい。あえて刃器としなかったのは先述した様に素材としてのウェイトを強く考るためであり、また技法と用いなかったのは、「鈴桶型刃器技法」が多量の資料分析を通して明確にされているのに対して西北九州一帯の縦長剥片についての技術的な問題が十分な資料をもって導き出されていないと判断したからに他ならない。現時点では鈴桶型刃器技法ならびにそれと深い関連が予想されるものに対する便宜的な呼称として用いておきたい。<sup>註18</sup>

### 三、縦長剥片出土の遺跡（第二図）

黒耀石製の縦長剥片が出土している縄文時代の遺跡は現在の時点で西北九州（福岡・佐賀・長崎・熊本）において中期・後期を主体に五〇個所近くが知られている。縦長剥片を素材にしたと考えられる剥片鏃・つまみ形石器・サイドブレイドなどの剥片石器の出土遺跡を加えると七〇個所を越えるものと推定される。<sup>註19</sup>この遺跡数は西北九州の縄文時代の遺跡数からすれば、縦長剥片の利用頻度の差こそあれかなり普遍的な存在と見なすことができよう。<sup>註20</sup>縦長剥片の石核と推定される資料の出土が限られていることや、縦長剥片およびそれを素材にした剥片石器が少ない遺跡において「鈴桶型縦長剥片技術」によるものと直ちに断定できないかも知れないが遺跡の分布や時期を考慮すればその蓋然性は極めて高いと判断されるのである。



第2図 縦長剥片出土遺跡分布図（数字は本文中の遺跡番号） ▲ 腰岳

### 遺跡の類型

縦長剥片およびそれを素材とした剥片石器の出土遺跡は縦長剥片の石核の有無やあり方を一つの基準に類別されるであろう。七〇個所を越える遺跡の中で縦長剥片を剥離したと推定される石核の出土例は乏しく、一〇個所足らずしか知られていない現状である。例えば長崎県の岩下洞穴・岩谷口岩陰遺跡、佐賀県の坂ノ下遺跡⑧⑨、白蛇山洞穴・金剛島遺跡⑬、源平岩洞穴などで少数出土しているのみである。これらの遺跡はいずれも腰岳の周辺に立地し、しかも共伴する土器は縄文時代中期および一部前期と推定されるのである。これとは逆に時期については明確にし得ないが縦長剥片の石核を多量に出土する遺跡として腰岳の山腹に立地する鈴桶遺跡、それに長崎県北松浦郡世知原町の観音木遺跡、同平河原遺跡などが存在するのである。この三遺跡のうち正式な調査が実施されているのは鈴桶遺跡だけであるが、残り



二遺跡においても多量の石核が採集されているのである。しかもこれらの遺跡における石器類の組成は極めて単純で限定された器種―石核・縦長剥片・つまみ形石器など―が多く出土する傾向が窺えるのである。しかも遺跡の立地についてもほぼ同様な要素が抽出できると思われる。すなわち鈴桶遺跡は三方が急斜面で谷へ落ち込み、強い高距性を示めずやせ屋根上で生活の立地としての条件は必ずしも恵まれてない点は大いに注目されよう。観音木・平河原の両遺跡は腰岳と直線距離にしてそれぞれ約七―九kmを計り、伊万里市との境をなす国見岳（七七六m）の両側に隣接する山中に立地し、その標高は五一〇mと六四〇mと極端に高く縄文時代の遺跡にあっては特異な占地を示めず遺跡と考えられる。

以上の諸遺跡においては縦長剥片の石核が出土しているものゝ残りの大多数の遺跡では縦長剥片やそれを用いた製品が出土するにもかかわらず石核については階無の状態である。例えば福岡県北古賀遺跡では八〇点余りの縦長剥片とその製品が報告されているが漆黒色―黒色をした黒耀石製の石核は一点の出土もみないのである。

また縄文時代後期を主体とする福岡県柏田遺跡においては一二〇〇余点の膨大な量の縦長剥片とそれを用いた剥片石器が出土しているが、その石核と推定されるものは僅か数点という状況である。

以上の様に縦長剥片に関連する遺物の出土状態は遺跡によって異なった様相が窺えるので、これらの遺跡は大まかに三つの類型に區別できるであろう。①腰岳近くに立地し縦長剥片や限られた器種の石器、それに多量の石核を出土する遺跡群。これを仮に「鈴桶型遺跡」と呼ぶことにする。②量的には少ないが縦長剥の石核が存在し縦長剥片およびその製品が認められる遺跡群。腰岳に隣接する地域に占地しており、時期的には縄文時代前―中期にほぼ限定される。「坂ノ下型遺跡」と呼称する。③縦長剥片やそれを用いた剥片石器が在存しながらその石

核が見られない遺跡群。大多数の遺跡がこれに含まれると推定され、一応「北古賀型遺跡」としておく。

この三つの遺跡の類型は西北九州における縦長剥片を素材とした「縦長剥片石器文化」を究明する上で、遺跡の性格やあり方を表徴する基本的な要素の一つとなり得るであろう。また遺跡間の交流についての問題解決の糸口とされるであろう。以下「鈴桶型縦長剥片技術」を主たる要素として展開したと推定される「縦長剥片石器文化」へのアプローチの基礎的作業である分布と時期についての予察を行うことにしたい。

**分布** 縦長剥片の主要な素材を提供していると考えられる伊万里市腰岳を中心にその拡がり、特に周辺地域を抽出することによって分布圏の見通しをたてると、まず北および東では福岡県のほゞ中央を北流する遠賀川沿いの諸遺跡を挙げることができる。遠賀郡の山鹿貝塚・榎坂遺跡<sup>15</sup>、榎坂遺跡<sup>16</sup>、嘉穂郡の北古賀遺跡、田川郡の上野遺跡<sup>17</sup>など後期を主体とする遺跡において縦長剥片およびその製品が知られている。特に榎坂・北古賀の両遺跡では比較的まとまった資料が出土しており、石核は見られないが縦長剥片に観察される諸特徴は最初に述べた概念規定に符合し「鈴桶型縦長剥片技術」の存在を物語っている。南の地域での拡がりについて現時点では明確にし得ないのであるが、熊本県泗水町三万田東原遺跡<sup>18</sup>、宇土半島突端に接する戸馳島の浜の洲貝塚<sup>19</sup>、本渡市大松戸遺跡・同妻の鼻遺跡<sup>20</sup>などで出土例が知られている。一方長崎県では長崎半島先端の脇岬遺跡<sup>21</sup>において好資料が出土しており、また五島列島では福江島の宮下貝塚・女亀遺跡<sup>22</sup>、若松島の土井ノ浦<sup>23</sup>、中通島の立石<sup>24</sup>、小串さらに北の宇久島の平において散見することができる<sup>25</sup>。

以上の諸遺跡が現在知り得る腰岳から最も離れた遺跡として分布での周辺地域を構成しているものと考えられる。なお縦長剥片を素材に用いたと判断される剥片鏃などの出土遺跡を加えるとその分布域は多少拡がるであろう。

が大勢を変化させるとは思われぬ。この様に分布の上では長崎・佐賀をはじめ福岡の西側、熊本の北西地域とまさに九州の北西部の地域に限られており一定の分布圏を形成していると見なされる。当然予想されるように分布の集中する地域は腰岳に近接する佐賀県の西松浦郡および長崎県北松浦郡であり、それも腰岳の西側に顕著である。これに対して北側の東松浦半島や東側の佐賀郡や神崎郡ではほとんど見られない様であり、腰岳との距離の遠近だけで必ずしも把握できない面が予想され今後の問題提起とされる。

**時期** 縦長剥片の出自については極めて整った剥離技術が認められるだけに最大の関心が払われるところであり、かつて鈴桶遺跡の調査ではその技術の見事さから先土器時代の所産と判断されたのである。現在の所、縄文時代早期における確実な出土例を聞かないので前期の時期での存在が問題視される。ここ十数年間、佐賀・長崎での調査において縄文時代前期の後半に位置づけられる曾畑式土器に共伴する可能性が示唆されている。すなわち岩下洞穴・白蛇山岩陰・岩谷口第一岩陰などの諸遺跡では曾畑式土器に伴うと考えられ、また金剛島遺跡では曾畑式土器がほぼ単純に出土しているだけに共伴の可能性は特に強いとみなされる。たゞ各遺跡の曾畑式土器を出土する文化層（包含層）から中期あるいは後期と推定される土器片が若干見られるためやゝ明確さを欠くとも思えるが、遺物の全体的なあり方を考慮すれば前期の後半の時期に登場する石器技術として把握されるであろう。

次の中期の時期では単純遺跡での出土例から確実に共伴すると判断でき、しかも共伴土器は中期の中葉から後葉に位置づけられている阿高式系土器である。前葉の並木式土器については遺跡数そのものが少ないこともあって不明と言わざるを得ないが、共伴するものと思われる。九州における縄文時代中期の代表的な阿高式土器の主要な拡がり―阿高文化圏―については福岡・大分・宮崎の東側の一部をのぞく九州の中央部から西側一帯の広い

範囲が想定されている。<sup>註32</sup>しかしながら現時点では縦長剥片を伴出する阿高式系土器の遺跡の分布範囲は腰岳に近接する西側地域にほゞ限定されるのである。なお阿高式系土器は南九州と福岡—長崎にかけての地域、それに、有明・八代海の地域の三つの地域に区分されることが示摘されており、中期の縦長剥片の分布域はまさにその一つである福岡から長崎にかけての阿高式系土器のそれに一致するものとして把握されるものである。<sup>註33</sup>

さて、縦長剥片およびそれを素材とした剥片石器が最も盛行する時期は従来から考えられている通り縄文時代後期に置くことができ、その分布範囲についても先に述べた周辺地域まで拡がっているのである。現在用いられている土器の型式名に従えば、後期の前葉に位置づけられる阿高式系土器、鐘崎式土器、北久根山式土器、西平式土器、それに三万田式土器の各土器群に伴うものと推定される。これらの土器群の主要な分布域がほゞ西北九州に想定されるだけに縦長剥片との関連も当然想起されるのであるが、細部にわたっての共伴関係の検討は今後の課題とされよう。

最後に縄文時代晩期についてであるが、この時期の遺跡で明確に「鈴桶型縦長剥片技術」によると推定される縦長剥片、石核、それにその製品が伴うと判断される例は今日までの段階では、階無に近い状況と思われる前期の状況以上に明瞭さを欠くのである。たゞ長崎県五島の三井楽貝塚<sup>註34</sup>など弥生時代の若干の遺跡において剥片鏃の出土例が聞かれるが、これがはたして縄文時代中・後期に盛行した「鈴桶型縦長剥片技術」の上に立脚したものかどうかの判断がまず下されなければならないであろう。仮に三井楽貝塚出土の縦長剥片や剥片鏃がそうであれば遺跡の所在と共にその時期に大きな興味がもたれ、縄文時代晩期から弥生時代にかけての縦長剥片技術の問題が大きくクローズアップされることになろう。

縦長剥片およびそれを素材とする剥片石器文化は西北九州の縄文時代にあつて極めて特徴的な存在として受けとめられるだけに、現時点ではその時期についても縄文時代の中・後期すなわち西北九州の阿高式系土器の展開以後から黒色磨研土器の盛行以前という現定した時期を想定しておきたい。たゞその出自の時期も含めて曾畑式土器との関連性が示唆されることから前期後半まで溯り得ると考えられよう。

#### 四、縦長剥片石器文化の問題

鈴桶型縦長剥片技術が西北九州の縄文文化に認められることについては異論の余地がないほど明らかになつたと考えられる。しかもその時期や分布についてもある見通しを持つことができるようになったのであるが、今後究明されるべき課題を残している事も確しかであり、その幾つかの問題点と予察を挙げることにする。

出自 縦長剥片の出現の時期については前期の後半まで溯り得る可能性が示唆されているものゝその背景については不明であるが基本的いくつかの考え方はできるであろう。その一つとして縦長剥片出現以前の縄文時代前期あるいは早期の剥片石器技術との何らかの関連、あるいはさらに溯つて後期旧石器時代における剥片石器文化の系統の上で理解され得るものかということである。これは縦長剥片の出自をそれ以前の系統あるいは伝統の中に見い出そうとする考え方とされよう。今一つは全く新たな剥片技術として登場するものとしての把握の方法である。これには西北九州の地において独自に展開したのか、または他所からの直接的ないし間接的な影響によるものかが問われなければならないであらう。他所からの何らかの影響を考える場合、このケースの可能性がより大きいと判断されるわけであるが、縦長剥片技術の全体的な拡がりおよび、より先行すると推定される遺跡の

分布から考慮して東の方に求めることはまず不可能であり、北および西に求めざるを得ないので必然的に韓半島南部との関連が問題視されることゝなるう。

韓半島の縦長剥片およびその製品について断片的にしか知り得ない時点で彼我との関連は極力控えなければならぬが西北九州における縄文時代前・後期のこれまでの知見からある程度の予測は許されるであろう。その一つとして古くから指摘されている東三洞貝塚を介しての韓半島の櫛文土器と西北九州に主要な拡がりを見せる曾畑式土器との関連が挙げられる。両者のC<sup>14</sup>による実年代をはじめ、土器の器形・文様、それに滑石混入の胎土など共通する要素が抽出されることについては周知の通りである。先に触れた様に鈴桶型縦長剥片技術による縦長剥片や剥片鏃が曾畑式土器に共伴する可能性が強く示唆されていることから関連性の一端が説かれるところである。また彼我との関係についてこれまた常時登場する石器としての「石鋸」や「石銚」の存在、さらに大形の「結合式釣針」についても両者の比較の上で重要な類似点として指摘されているのである。これら韓半島南部と何らかの関連を有すると判断される資料はある一定の時期にのみ限定されるのではなく、何度となくあるいは絶え間ない交流の過程での産物として把握されるであろう。そこで鈴桶型縦長剥片技術についても腰岳という良質な黒耀石の産出地の存在という基本的な条件の上に直接的あるいは間接的な影響が予測されよう。

縦長剥片技術の出自についての一つの仮説として韓半島との何らかの交流の上で把握されるのではないかと考えたが、もう一方の旧石器時代を含めた剥片石器技術の系統についても当然考える必要があるであろう。

### 遺跡の種類と性格

縦長剥片およびその製品を出土する遺跡は石核のあり方から大まかに三つの類型に区別され得ると考え、これに関して若干の問題点を挙げてみたい。

まず腰岳に近接する鈴桶遺跡、観音木遺跡、平河原遺跡の存在はその立地からすれば必ずしも生活条件は良好とは思われずむしろ特殊とさえ考えられる状況である。しかもそれらの遺跡における出土遺物は縦長剥片やその石核など限られた器種が多量に存在するという傾向が窺え、しかも良質な黒耀石の原産地に隣接するという基本的な条件が加えられるのである。これらの諸特徴はあたかも剥片石器の素材や特定の製品の製作する場所を彷彿させる要素とされよう。一方、縦長剥片やその製品が相当数発見されていながらそれでいて石核が階無もしくは見合う数見られない北古賀型遺跡の存在することも明瞭な事実である。これらの遺跡では当然何らかの方法によって剥片石器の素材あるいは製品を入手しているわけである。この事は縦長剥片の問題を離れて腰岳産の黒耀石の使用という事からも原石地と直接的な、あるいは間接的に中継地を介して生活地との結びつきが何らか手段によって存在したことを物語っている。そこで一つの考え方として鈴桶型遺跡の存在が改めてクロズアップされることとなり、また多くの北古賀型遺跡の存在の理解が初めて容易になるものと推測されるのである。

いずれにしても鈴桶型遺跡を黒耀石の素材もしくは石器の製作地として想定するためには、いかなる方法で集中的に製作されたのか、また北古賀型遺跡ではいかなる過程を経て入手したなどかの具体的な問題を含めてその社会的な背景についてのアプローチが基本的な問題として横たわっているのである。同時に原石の問題についても、腰岳産以外の石材の使用、すなわち北古賀遺跡では鈴桶型刃器技法と類似した姫島産黒耀石製石核の存在が報告されており、また幾つかの遺跡において肉眼的な観察による限りでは腰岳産黒耀石の諸特徴とは異なる黒耀石が少数認められるのである。さらに西北九州に原石地が存在するサヌカイト質製の剥片石器との関連も同様に問題とされるべきであろう。

## 縦長剥片石器文化

「鈴桶型縦長剥片技術」による縦長剥片およびそれを用いた石器群が縄文時代の中・後

期を主体として西北九州の一带に認められることについてはもはや明白な事実として受とめ得ると考え、この技術を一つの基礎とする文化に対して仮に「縦長剥片石器文化」と呼称することにしたいと考えている。この文化は鈴桶型縦長剥片技術をはじめとして、剥片鏃の盛行や組合せ石器と推定される石鏃を含めたサイドブレイドの存在、さらに鋸歯状の側辺を具備する石銛としての用途が与えられる石器、それに 西北九州型の結合式鈎針、土器底部の海棲哺乳類骨の圧痕などそれ以前の時期に階無に近い状態であり、しかも西北九州の地域において集中的な出土例が知られるのである。これらの遺物が時期的に全く同時に存在するものではなく、またその分布域が常に重なるものでもないが、鈴桶型縦長剥片技術を基礎とする縦長剥片石器文化を構成する上での要素として把握できるものと考えるのである。また縦長剥片などの遺物を出土する遺跡での様相の違いから製作地的なものゝ存在が予想され、製作のされ方や用いられ方もこの文化を考察する上での重要な課題とされるであろう。今後「縦長剥片文化」を構成すると予測される諸要素についてあらゆる角度からの詳細な検討が必要であり、その基本的な要素として縦長剥片を抽出し問題提起としたい。

## 註

1. 島田貞彦「肥前国嬉野石器時代遺跡」人類学雑誌、四〇—一、一九二五
2. 浜田耕作・小牧実繁・島田貞彦「肥前国有喜貝塚発掘報告」人類学雑誌、四—一、一九二六
3. 賀川光夫・古田正隆・上田俊之「剥片利用の石器文化」西日本史学会研究発表要旨、一九六二



4. 杉原莊介・戸沢充則・横田義章「九州における特殊な刃器技法」考古学雑誌、五一―三、一九六六
5. 麻生優「岩下洞穴の発掘記録」佐世保市教育委員会、一九六八
6. 木下之治・柴元静雄・森醇一郎「坂の下遺跡」佐賀県文化財調査報告 一八、一九六九
7. 永井昌文・前川威洋・橘昌信・他「山鹿貝塚」山鹿貝塚調査団 一九七二
8. 潮見活「北古賀遺跡」嘉穂地方史―先史篇 一九七三
9. 片岡肇「長崎県北松浦郡世知原町岩谷口遺跡群の発掘調査」平安博物館紀要 六、一九七六
10. 賀川光夫「北九州西北部にみられるサイドブレイドについて」考古学ジャーナル、一六・一七、一九六八
11. 片岡肇「いわゆる『つまみ形石器』について」古代文化 二七―四 一九七八
12. 下川達彌「剝片鏡考」長崎県立美術館研究紀要 一、一九七三
13. 萩原博文・久原卷二「九州西北部の石鏡、サイドブレイドについて」古代文化 二七―四、一九七五
14. 横田義章「西北九州における縄文時代の一剝片石器群」九州歴史資料館研究論集 二、一九七六
15. 橘昌信「西北九州における黒曜石製の縦長剝片についての一考察」山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告 第四集 一  
九七七
16. 観音木・平河原の両遺跡の資料についてはかつて地本で丹念な採集を行なっている岡村広法氏のご厚意によって拝見させていたゞく機会を持った。なお観音木遺跡については註 10・11・12 で触れられている。
17. 柏田遺跡出土の該当する資料二七点の観察の結果、二五点に認められた。
18. 註14において、「鈴桶型刃器技法を『基盤技術』とする石器群」という興味ある見解が示めされている。

19 註12において長崎・佐賀県内の「剥片 出土遺跡一覽」(一九七三年)で四七遺跡が挙げられており、その後の調査および福岡・熊本両県の出土例を加えると七〇箇所近くになる。

20 佐賀県立博物館「九州の原始文様展」(一九七七)の図録所収の遺跡地名表によると、縄文時代中・後期の長崎・佐賀・福岡・熊本四県で一三四遺跡が挙げられている。この遺跡数には中・後期にまたがるものをそれぞれ数に入れており、しかも福岡の東部、熊本の東部、南部も含まれている事を考慮すると西北九州における「縦長剥片技術」に関連する遺跡数が一段と普遍的な存在と見なされる。

21 森 一郎「白蛇山岩陰遺跡」佐賀県立博物館調査報告書 一・一九七四

22 佐賀県教育委員会「金剛島遺跡・源平岩洞穴遺跡発掘調査概報」佐賀県文化財調査報告書 二二三、一九七三

23 小田富士雄「榎坂遺跡」日本考古学年報二四、一九七三

24 九州考古学会「北九州古文化図鑑」一、一九五〇

25 坂本経 他「三万田東原—調査概報—」一九七二

26 乙益重隆・前川咸洋「縄文後期文化—九州」新版考古学講座 三、一九六九

27 山崎純男「天草地方の始原文化の一側面」熊本史学 四〇、一九七二

28 賀川光夫「脇岬貝塚」日本考古学年報 二四、一九七三

29 賀川光夫「宮下貝塚」長崎県文化財調査報告 九、一九七一

30 女亀遺跡の資料については桑山龍進氏のご好意によって拝見する機会を得た。また土井ノ浦については同氏のご教示による。

31. 地本の高校および瀬尾泰平氏の採集されている資料を実見する機会を得た。時期については不明である。
32. 前川威洋「九州における縄文中期研究の現状」古代文化 二一―三・四、一九六九
33. 宮内克巳・田中良之「縄文式土器」福岡県山門即瀬高町所在大道端遺跡の調査、九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告 一四、一九七七 この中で阿高式土器分布圏は中期の後葉から終末にかけて、福岡から長崎にかけての地域、有明・八代海周辺地域、南九州の地域という三つの地域に分解することが示されている。なお南九州は独自の発展を示すのに対して他の二者はコミュニケーションが保たれているの見方がなされている。
34. 鈴木重治「三井楽貝塚」『五島遺跡調査報告』長崎県文化財調査報告 二、一九六五